

ダケノボリ・オンダの信仰と伝承

城崎陽子

1. はじめに

「嶽のぼり（ダケノボリ）」と「御田植祭（オンダ）」という習俗を通じて、二上山周辺地域の信仰と伝承を考察するのが本稿の目的である。「嶽のぼり」は文字通り、地域の「嶽（ダケ）」に酒肴を携えて登る行事であり、「御田植祭（オンダ）」は農事に先立って秋の豊作を予祝する行事である。論の中心に据えるのは、毎年4月23日に行われる二上山の「嶽のぼり」と當麻山口神社の「御田植祭（オンダ）」である。なお、本稿においては行事の名称を統一し、以下「ダケノボリ」「オンダ」の呼称をもちいることとする。

二上山のダケノボリは當麻山口神社のオンダと同日に行われる点、一つの特徴となっている。しかし、現行の行事をうかがう限り、オンダとダケノボリの接点は見だし難い。オンダを予祝儀礼として意義付けるならば、こうした予祝儀礼がダケノボリとの接点をどのようにもつかということを明らかにすることで、ダケノボリとオンダの双方に共通する二上山周辺地域の信仰的基盤を解明することができると思われる。

2. 二上山のダケノボリと當麻山口神社のオンダ概要

まずは、二上山のダケノボリと二上山東麓に位置する當麻山口神社のオンダについて、概要を記す。なお、以下に掲げた事例は平成18年4月から、20年3月までの共同研究期間に聞き書きしたものを主に用いているが、市町村史等によって補った部分もある。その部分には一々出典を記した。

（1）二上山のダケノボリ

毎年4月23日に二上山ではダケノボリが行われる。この日は、午前10時半ごろから、二上山を挟む當麻側と河内側から随時登山の登録が行われる。この時、登山者は小ぶりのゴミ袋を手渡され、ゴミを拾いながら二上山山頂を目指す。ゴミ拾いのボランティア活動とダケノボリ行事を集合させることで、地域住民の参加や、近隣の公立学校との提携を容易にしているようであった。実際、登山者の中には、子どもの姿も多くうかがえた。二上山の名は雄岳と雌岳の二つの峰をもつことに由来する名であるが、このうち雌岳山頂では登ってきた人々が持参した弁当を摂る光景が見られ、登山した人々を対象とする抽選会も行われていた。

ところで、現行の二上山のダケノボリは、4月23日に行われるが、本来、旧暦の3月23日に行われていた。この日、人々は二上山に登るにあたり手作りの「すし」を作って持参し、山頂で食べたという。

祭日について、『西国三十三所名所図会』には、つぎのような記述がある。

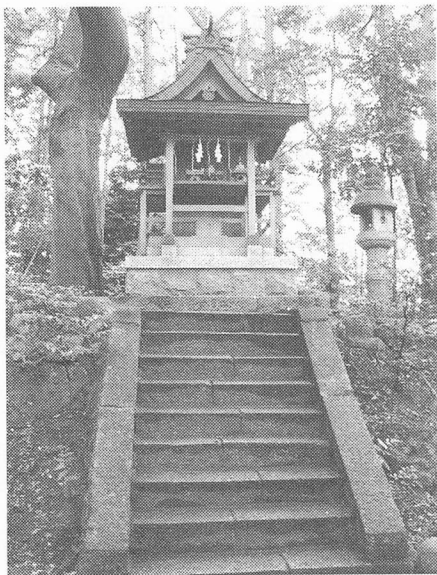
例年三月二十三日薩州より修験者きたり、當麻寺の僧侶とともに護摩供を修法す。これこの近村より、請じて五穀成就の祈りをなすと聞こゆ。この日は山上に酒の上温、肴の煎売、あるいは覗きからくり、放下師など出て賑はし。隣村の老若男女嶮岨をことともせず戯れ登

りて群集す。この旬の法会といふべし。

この記述から、当時、薩州の修験者と當麻寺の僧侶が「護摩供」を行っており、行事そのものが「法会」と捉えられていたことがわかる。現行のダケノボリに當麻寺は関わっていないが、江戸時代末頃まで、當麻寺中之坊の僧侶が二上山山頂の神社の別当という役分で當麻山口神社の神職と交替で祭事を行っていたといい、「御田植が晴れなら、練供養も晴れ」といった口碑も残されているように、当該地域の中心的な寺院とダケノボリ・オンダ行事との関わりがあったことを示唆している。

さて、現行のダケノボリは、二上山から流れ出る水と関わる地域が行っており、「嶽の郷」とも称されるその地域の数に60余にも及ぶという。中心となるのは當麻山口神社の氏子地域16ヶ村であり、「嶽の権現さん、雨降ってたもれ」と言いながら、幟をもって登拝し、一年の稲作りに適度な雨を降らして欲しいと願う行事であったという。現在、山頂に「嶽の権現さん」と呼ばれる社はないが、『西国三十三所名所図会』には「葛木二上神社二座」として「二上山の男嶽の絶頂にあり。今権現と称す。」という記述があることから、「嶽の権現さん」とは現在も二上山雄岳山頂に鎮座している「葛木二上神社」の往時の呼称であったことを確認することができる。

當麻山口神社境内に祀られる春日若宮神社は、二上山から降りてきたアメノオシクモネノミコトを祀った社といい、干ばつの際にはこの神に雨を祈るということから、あるいは、この社がそ



春日若宮神社

れにあたっていたのかもしれない。

ちなみに、アメノオシクモネノミコトは『中臣寿詞』に登場する神である。

中臣の遠つ祖天のこやねの命、皇御孫の尊の御前に仕へまつりて、天のおし雲ねの命を天の二上に上せまつりて、神ろき・神ろみの命の前に受けたまはり申ししに、『皇御孫の尊の御膳つ水は、顕し国の水に天つ水を加へて奉らむと申せ』と事教りたまひしによりて、天のおし雲ねの神、天の浮雲に乗りて、天の二上に上りまして、神ろき・神ろみの命の前に申せば、天の玉櫛を事依さしまつりて、『この玉櫛を刺し立てて、夕日より朝日の照るに至るまで、天つ詔との太詔と言をもちて告れ。かく告らば、まちは弱葦にゆつ五百篋生ひ出でむ。その下より天の八井出む。こを持ちて天つ水と聞しめせ』と事依さしまつりき

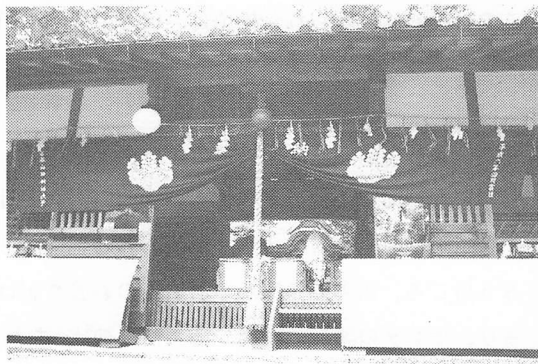
以上の記述から、アメノオシクモネノミコトは皇御孫の食前の水に「天つ水」を加えることを命じられるという、水に深く関わる神であり、こうした神話的背景が春日神社に関わる伝承の背後にあると考えられる。

昔は、ダケノボリまでに「ナワシロシメ」をすませたか、あるいは遅くとも「モミソロエ」はしておいて、その余分の「メコボレ」のもみをもみづきして、すしをつくって食べたという口碑（『香芝町史』『大和下田村史』）も残されていることから、ダケノボリと農事の関わりも深くうかがえ、元来、ダケノボリとオンダが信仰的な基盤を同じくする行事であったことを容易に推察させる。

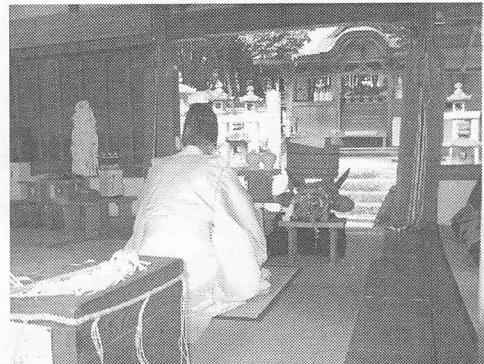
(2) 當麻山口神社のオンダ

二上山麓に位置する當麻山口神社は、延喜式神名帳に載る大和国山口神社の一つであり、アマツヒコホホノニギノミコト、コノハナサクヤヒメノミコト、オオヤマヅミノミコトの三柱を主祭神とする社である。当該社は近郷16ヵ村（當麻・大橋・西中・勝根・今在家・染野・市場・岡村・大中・有井・神楽・築山・大谷・池田・野口・鎌田）の氏子地域で支えられている。さて、毎年4月23日のダケノボリにあわせ、當麻山口神社では「オンダ（御田植祭）」が行われる。この日、神社拜殿で祈年祭、および戦没者の鎮魂祭が執行されたのち、拜殿下の庭に、四方に注連縄を張った斎場を設け、ここでオンダを行う。

本殿にて祭式がとりおこなわれ、続いて斎場にて、稲作に関わる一連の所作が行われる。諸役は、手綱曳き1名、牛の前役・後役各1名、鍬役1名の計4名で、田おこし、田ならし、畦作り、田植の順に所作が行われ、最後に御供撒きが行われた。なお、この時、供えられたヒバ苗は、田植に際して、虫除けとして、また良い苗になるようにと田の四隅や水口に挿すという。



當麻山口神社



御田植祭

3. ダケノボリの諸相

先に、二上山のダケノボリとオンダが元来、信仰的基盤を同じくするものではないかとの推論を立てたが、ここで、他の地域のダケノボリやオンダを例にとりつつ、考察をすすめてみたい。

【事例1】都祁のダケノボリ

「都祁のダケ（嶽）」と呼ばれる山の頂きには「龍王さん」が祀られており、この山の麓にある南之庄集落では、毎年4月15日は昼食を携えてここへ登る。この行事は、これから「田へ出る（農事を始める）」ことを龍王さんに報告するためだという。

ところで、ダケノボリは、この行事の他にも干ばつに際して雨乞い祈願のために行われることがある。なお、都祁の各集落にはダケ山があり、ダケ山で松明をたいて雨乞いをしたともいう。

ちなみに、都祁には水分神社が鎮座している。当該の社は元宮である都祁山口神社から天禄3年（972）に遷座したもので、この遷座の日になみ、毎年10月25日（旧暦9月25日）に例大祭が行われる。

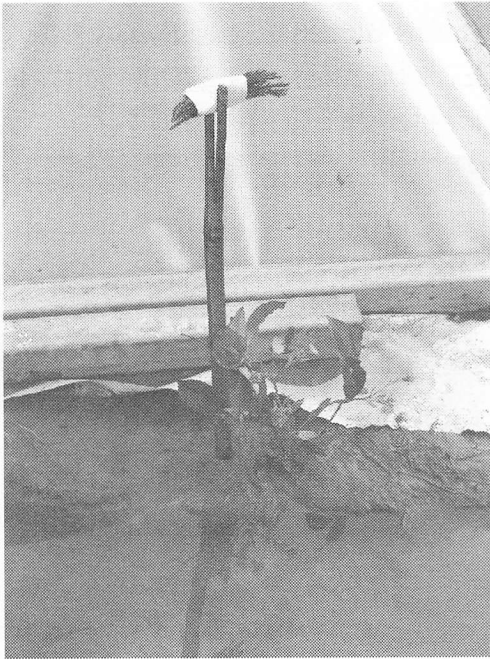
【事例2】室生村のダケノボリ

室生村無山の集落にはダケと呼ばれる山があり、そこで雨乞いをしたという。室生村無山のダケノボリは4月23日で、神野山に登るともある（『奈良県史』）。

【事例3】龍門のダケノボリと吉野山口神社のお田植祭

龍門地域のダケノボリは4月17日に行われ、「ダケマツリ」とも呼ばれる。五穀豊穡や子授け祈願に登るといい、その年に男の子が産まれた家は酒をもってここに登らなければならない。この山の頂には山の神と水の神の両方が祀られている。現在、吉野山口神社（祭神は大山祇神）にある高鉾神社は龍門嶽山上の高鉾神社を540年ほど前に里の社の境内に降ろしたのだといわれる。

龍門地域に住む人々は、嶽から流れる水をつかうといい、この水をつかっている集落同士は水の縁が深いのだという。



苗代の水口に挿した松苗

ちなみに、吉野山口神社では、4月22日にオンダが行われる。午前10時ごろからはじまり、午後に御供撒きが行われる。芸能は行われない。なお、この日社殿に供えられた松苗は、田の苗代の水口に挿すという。

【事例4】御前原石立命神社のオンダ

奈良盆地の東に位置する古市の御前原石立命神社では毎年2月11日にオンダが行われる。午後2時30分ごろ、當屋頭の家から、諸役のお渡りがはじまり、オンダの諸役や松苗や種 粃が神社へむかう。社殿前での祭儀ののち、オンダの儀がはじまる。拝殿下に苗代に見たてた囲みが注連縄によって区切られており、ここで畦作りから種撒きまでの詞章がよみあげられて終る。

オンダに供えられた松苗は、農家に配られ、農家は苗代の、水を排水されるところにこれを挿すという。これは、水源に位置する神社から良い水が下へ流れるようにという意味であるという。

【事例5】加守神社のオンダ

二上山の麓には、當麻山口神社からやや北寄りに、加守神社が位置している。加守神社では、毎年4月15日にオンダが行われる。

行事は、本殿で行われる祈年祭の後、午後2時頃から社殿階下の斎場でオンダが執行される。オンダは「田人」1名、「牛役」4名（小学生六年生の子供がつとめる）で、田おこし、畦作り、苗代作り、田植（松苗を用いる）と、稲作に関わる一連の所作が執り行われ、最後に牛が産気づく所作を示し、仔牛が産まれて終る。行事の後に御供撒きを行う。

以上、各地のダケノボリやオンダをみてきた。二上山の事例も含め、ダケノボリに共通しているのはダケ（嶽）とダケノボリをする人々がダケから流れ来る水との縁を強く意識していることである。また、ダケノボリは一年の農事はじめに行われ、農事に関わる天候の具合を祈願することが行事の目的であることもうかがえた。

一方、當麻山口神社のオンダの事例ほどダケノボリとの結びつきが顕著ではないが、他の事例にみられるオンダにも、例えば、供えられた松苗を田の水口（あるいは排水口とも）に挿すという所作に、オンダの見立てによる予祝とともに、水に関わる呪力を豊穣へと結びつけようとする意図があるのではないかと考えられる。「水」の縁と天候への願いがダケをとりまく地域の信仰であるとするならば、こうした地域の信仰の一方に位置するのがオンダであり、「水」の縁にダケノボリとオンダとの接点が生じたといえよう。

4. おわりに—ダケノボリの意義—

各地のダケノボリやオンダの事例を通じて、ダケノボリとオンダの信仰的基盤が、ダケ（嶽）から流れ来る水に対する信仰にあったことがうかがえた。そして、各集落のダケには、ダケから流れ来る水に対する信仰を基盤にして、人々の生活や生業の安寧を祈る対象としての意義があった。したがって、その水源が聖地化されることは当然の経緯と考えるべきであろう。ダケノボリに対する信仰の原初的な部分は聖水信仰にあり、ダケによってもたらされる「水」に子授けの信仰まで付随するという点には、ダケノボリが「豊穣」を祈願の根本に据えていることによる。

また、當麻山口神社の末社である春日若宮神社や、【事例1】の都祁水分神社、【事例3】の高鉾神社にうかがえるダケからの遷座伝承は、本来、山において祀られるべき水の神が、里へ降ろされて、祀られたという祭祀形態の変化を具体的に示していると考えられる。特に、各地に残る「山口神社」という「山（聖地）」と「里」との関係性をその名に残す社には、聖地を祀る里の社としての役割が顕著であったとみるべきであり¹、このことは、「當麻山口神社は本来二上山を御神体にする社であった」という口碑にもうかがえる。

さて、オンダには、予祝行事としての意義がある。また、「水」との関わりといえ、この予祝行事の意義は、【事例3】の吉野山口神社や【事例4】の御前原石立命神社のオンダにおける松苗を水口に挿すという行為に反映されていることは先にも触れた。

オンダに生殖の意義が付帯されていることは、言うまでもなく²、ダケノボリとオンダとの接点にある「聖水信仰」に「子受け（豊穣の象徴）」の信仰が付帯されたことを示している。そして、より原初的と考えられるのは、聖水信仰であり、これはダケ（嶽）という各地域にある山を聖地とする信仰に基づいているのである。

最後に、前節において各地の現行行事をみてきたが、ダケとダケを囲む地域における聖水信仰とその地域における豊穣への祈りという一つの構図を考えた時、この構図にみられる一つの地域が「集落」という単位から「ヤマト」という「国家」の単位に置き換わったとしたらどうだろうかということについて一言触れておく。

国家の象徴でもある宮都を囲む地域は従来の「集落」単位の小さな地域を包括したものと考えることができよう。「集落」から「国家」という変転には、「集落」単位で信仰されていたダケとダケに集合される聖地性が、「ヤマト」という国家を象徴する宮都と、それを囲む山々に対する信仰へと拡大することが対照される。これが「ヤマト」と総称される国家の公的な祭祀に取り込まれていったと考えるならば、宮都と水の関係は原初的な信仰を伴ったサトとダケの関係を信仰の背景として持っていると言わざるを得ない。具体的には、万葉集における「藤原宮の御井の歌」は、こうした原初的な聖水信仰に根ざす原理を歌に表現していると考えられるのである³。

注

- 1 土井実氏は、論考「山口の神」のなかで（『歴史手帖』12巻6号、昭和59年6月）、夜支布山口神社をはじめとする14ヶ所の山口神社の祭神や祭礼等を通観しつつ、「山口神社は山の神・水の神であり、農民にとって大切な祈雨・止雨の信仰である」とし、「山口神社は水分神社とともに古代信仰の中心であった」としており、本稿の主旨もこれを大きくはずれるものではない。しかし、奈良盆地を囲む水分神社と山口神社の位置関係が必ずしも対称されてはいないことには、水分神社と山口神社の関係性に、さらなる解釈が必要であることを物語っている。
- 2 御田植祭等に関する参考文献としては、辻本好孝氏の『和州祭礼記』（昭和19年、天理時報社）、新井恒易氏の『農と田遊びの研究』（昭和56年、明治書院）等が各地の豊富な事例を伴ったものとしてあげられる。近時、御田植祭の構造分類を試みた武藤康弘氏の論考（「大和における御田植祭の系譜」『万葉古代学研究所年報』第4号、平成18年3月）は、従来の御田植祭研究を概観する意味でも参照されたい。
- 3 拙著『万葉集の編纂と享受の研究』平成16年、おうふう。